

# 博士學位論文審査要旨

2010年1月19日

論文題目： 反ユダヤ主義に関する神学的研究

学位申請者： 森山 徹（もりやま とおる）

審査委員：

主 査： 神学研究科 教授 森 孝一

副 査： 神学研究科 教授 石川 立

副 査： 神学研究科 教授 三宅 威仁

要 旨：

本論文は、「アウシュヴィッツ」を準備した反ユダヤ主義を、キリスト教はどのように受けとめるのか、という問いに応答しようとするものである。この大きな問いの中には、本論文で問われる次のような問いが含まれている。反ユダヤ主義とは何か、キリスト教的反ユダヤ主義はどのようにして誕生し、発展していったのか、それは克服可能なものなのか、キリスト教的反ユダヤ主義の認識はユダヤ教とキリスト教の関係、あるいは「国家としてのイスラエル」に対し、どのような洞察をもたらすのか。

本論文の各章の展開を述べる前に、先行研究と比較した本論文全体の特徴を以下のように指摘することができる。第一に、キリスト教的反ユダヤ主義理解を、神学的枠組みにとどまらず、反ユダヤ主義についての経験科学的理解の枠組の中に位置づけ、神学的考察における課題を際立たせている。第二に、日本におけるキリスト教的反ユダヤ主義の問題および、それへのキリスト教側からの応答に言及している。第三に、キリスト教的反ユダヤ主義の問題を、「アウシュヴィッツ」だけでなく、1948年に登場した「国家としてのイスラエル」にまで関連させている。第四に、従来のポスト・アウシュヴィッツ神学者たちは、伝統的なキリスト教神学に横たわるキリスト教的反ユダヤ主義を克服することこそが、両宗教の関係を再構築するための最重要の課題として考えてきたのに対し、本論文は、反ユダヤ主義がキリスト教そのものの基盤であることを、キリスト論や救済論の再考を通じて、述べている。

以上のような本論文の独自性は、次のように展開され、結論へと至っている。

第一章では、キリスト教的反ユダヤ主義を理解する際の方法論を問題としている。ここでは、従来の神学的な理解の仕方の有効性と課題を明らかにするために、それとは異なる様々な反ユダヤ主義理解の文脈に位置づけ検討している。

第二章では、伝統的なキリスト教神学の理解とは異なる反ユダヤ主義の神学的な定義を考察している。反ユダヤ主義についての定義を問題にするのは、これが反ユダヤ主義を歴史的に分析していくさいの暫定的な枠組みとなるからである。ここでは、反ユダヤ主義が猛威をふるった「アウシュヴィッツ」前後の時代に生きたバルト、ローゼンツヴァイク、ティリッヒの理解を参照することによって、キリスト教的反ユダヤ主義の暫定的な定義を模索している。

第三章では、キリスト教的反ユダヤ主義の歴史的変遷を考察している。キリスト教的反ユダヤ主義は、どのようにして生まれ、発展してきたのか。ここでは、キリスト教的反ユダヤ主義の位相の変化を歴史的に理解することによって、その神学的課題の所在を明らかにしている。

第四章では、三章で明らかになったキリスト教的反ユダヤ主義の神学的な課題の一つであるキリスト論の問題を考察している。キリスト教神学において、キリスト教的反ユダヤ主義は克服可

能なものなのか。ここでは、反ユダヤ主義と密接に結びついていた伝統的なキリスト論の再解釈の問題を、「宗教多元主義」、「史的イエス研究」、「ユダヤ的伝統にもとづいた再解釈」の三つの視点から検討している。

第五章では、従来のキリスト教神学とは異なるユダヤ教とキリスト教の両宗教関係を模索している。キリスト教的反ユダヤ主義の克服は、「アウシュヴィッツ以後」の両宗教の関係の再構築にどのように寄与するのか。ここでは、モルトマンによる救済史的世界観の再解釈と、グリーンバークによる契約的多元主義の主張から、「アウシュヴィッツ以後」の両宗教のあるべき神学的関係を問題にしている。

第六章では、「国家としてのイスラエル」に対するキリスト教の課題を考察している。「アウシュヴィッツ以後」の現代において、キリスト教徒はユダヤ人と、とりわけ「国家としてのイスラエル」とどのような関係を築いていくべきなのか、その関係を担保する、聖書的神学的理解とはどのようなものなのか、を考察している。

結論では、これらの問いから明らかになった神学的課題を踏まえつつ、冒頭で述べた「アウシュヴィッツ以後」におけるキリスト教への根源的な問い、「反ユダヤ主義はキリスト教にとってどのような意味をもつのか」という問いに対する答えを導き出している。最終的に、キリスト教にとって反ユダヤ主義は単に克服すべき対象であるのではなく、ユダヤ教からの「否」と、それへの応答そのものが、キリスト教にとっての欠くべからざる根拠となっていることの逆説性を明らかにしている。

本論文はキリスト教とその神学にとっての反ユダヤ主義についての網羅的で総合的な研究であるだけでなく、反ユダヤ主義の歴史・現状・課題を総合的に研究したものであり、困難なテーマについて意欲的に取り組んだ論文として、高く評価できると思われる。

よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

## 総合試験結果の要旨

2010年1月19日

論文題目： 反ユダヤ主義に関する神学的研究

学位申請者： 森山 徹（もりやま とおる）

審査委員：

主 査： 神学研究科 教授 森 孝一

副 査： 神学研究科 教授 石川 立

副 査： 神学研究科 教授 三宅 威仁

要 旨：

森山 徹氏は、2005 年 3 月、同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、2005 年 4 月、後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たすと共に、学位論文を提出した。2010 年 1 月 19 日午後 4 時より、神学研究科委員会は総合試験を実施し、約 2 時間にわたって森山氏から十分な神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について深い認識を有することを確認した。研究に必要な語学力は、博士論文執筆のための英語とドイツ語の文献を正確に読みこなせていることにより十分なものと認められる。

以上の結果により、総合試験に合格と判定した。

# 博士學位論文要旨

論文題目：反ユダヤ主義に関する神学的研究

氏名：森山 徹

要旨：

「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」。第二次大戦後、アドルノはこのように記すことによって、600万ものユダヤ人の命を奪った西洋文明の帰結を痛烈に批判した。このような問いかけをキリスト教の問題として受けとめた一部の神学者および研究者たちは、「アウシュヴィッツ」の温床となったキリスト教的反ユダヤ主義を様々な立場から批判してきた。本稿は、このような「ポスト・アウシュヴィッツ神学」と呼ばれる試みに資することを念頭においているが、次の点で異なるものでもある。それは、キリスト教の反ユダヤ主義を問題とするさい、その対象と方法論を神学の領域に限定することなく、多方面の視座からアプローチすることによって総合的な理解を目指す点である。また本稿は、キリスト教的反ユダヤ主義を「克服」の対象として見なすだけではなく、キリスト教の伝統において等閑視されてきた神学的意味を前景化する契機として積極的に理解することを目的としている。これらの目的の下に、本論は以下のように展開する。

第一章では、従来の神学的な理解の問題を明らかにするために、一般的な反ユダヤ主義理解を三つに区別し、その中にキリスト教における反ユダヤ主義理解の問題を位置づけ検討している。まず本質主義的アプローチは、ユダヤ人を本質主義的に規定することによって反ユダヤ主義を説明するが、それゆえに反ユダヤ主義と共犯関係に陥る危険性を有しており、伝統的な神学的理解もこれに属していた。次に機能主義的アプローチは、本質主義的理解の構築性を暴露するが、政治的に中立であるがゆえに現実の反ユダヤ主義者たちの運動を直接的に批判する力とはなりえなかった。そして構築主義的アプローチは、一方で政治的次元における反ユダヤ主義への抵抗を模索したが、その政治的行動ゆえに新たな反ユダヤ主義を引き起こし、他方でユダヤ人を何らかのかたちで規定するという点において、本質主義との類似した側面を有していた。この三つのアプローチの問題から、本稿ではキリスト教的反ユダヤ主義を理解するさいに、従来の本質主義的理解を回避し、機能主義的理解を参照しつつ、神学の領域における構築主義的理解を模索することが目的となる。

第二章では、本質主義的なキリスト教神学の理解とは異なる反ユダヤ主義の神学的な理解を、反ユダヤ主義が猛威をふるう時代に生きた三人の神学者・哲学者の理解から参照している。バルトによれば、反ユダヤ主義とは、ユダヤ人が神の自由な選びによって召し出され存続させられているという事実を、非ユダヤ人が拒絶し否定する振る舞いを意味していた。またローゼンツヴァイクは、反ユダヤ主義を、非ユダヤ人およびキリスト教徒がユダヤ人によって自身の不完全さを露にされることの反動であり、つまるところそれは自己憎悪に過ぎないと理解していた。そしてティリッヒは、反ユダヤ主義の特質を、ユダヤ人を否定的類型の下で社会的なスケープゴートとして扱うこととして理解し、この背景をユダヤ人が空間／土地の拘束を突破する時間の民であり、この民によって空間に拘束されている自身の在り方を突きつけられることへの反動として説明していた。三者の理解は共通して、反ユダヤ主義を、ユダヤ人に対する「遅れ」という事態を受け入れられない非ユダヤ人による反動的な振る舞いとして理解しており、この「遅れ」をどのように神学的に受容していくのが本稿の主たる課題となる。

第三章では、キリスト教的反ユダヤ主義の歴史的変遷を機能主義的に考察することによって、キリスト教的反ユダヤ主義の様々な形態を単一的・連続的に理解することを回避し、各時代における神学的課題を明らかにしている。キリスト教的反ユダヤ主義の起源として見なされてきた福音書の反ユダヤ的言説は、主流派ユダヤ教徒に対する「護教論」の産物であった。この護教論としての反ユダヤ的言説は、キリスト教がユダヤ教と分離し、地中海世界に広まっていく中で、キリスト論の正当性を証明するさいの否定的な前提として繰り返し引き合いに出され広められていくこととなる。中世のローマ帝国期において、ユダヤ人は、キリストを受け入れない者の末路として社会的に劣等化されつつ、このキリスト論の正当性を証しするものとして存続を保護されていく。1789年のフランス革命後にナポレオンによってもたらされた「解放」は、ユダヤ人をユダヤ教徒とは異なる一般市民として規定し、宗教的差別を廃棄したかに見えた。しかし、国民国家同士の覇権争いが強まる中で生まれた民族主義は自らを「選民」として位置づけ、逆にユダヤ人を自民族と馴染むことのない寄生的民族として規定する。「アウシュヴィッツ」は、このような歴史的背景の下にユダヤ人を迫害の矢面に立たせ、徹底した隔離政策によってユダヤ人に対する市民の無関心を強化し、組織的に600万ものユダヤ人を殺戮していったのである。このことから、反ユダヤ主義を保持してきたキリスト論と、ユダヤ教とキリスト教の積極的な連帯関係の模索が神学的課題として明らかとなる。

第四章では、キリスト教的反ユダヤ主義を保持し正当化してきたキリスト論の問題を以下の三つの立場から考察している。キリスト教の反ユダヤ主義が伝統的なキリスト論に基づいていることを指摘したヒックの宗教多元主義は、キリスト論を象徴的に理解することによる克服を試みた。しかし、これによって結果的にキリスト論が保持してきたキリスト教の絶対性主張を相対化し、ユダヤ教の絶対性主張をもおびやかす危険性を有していた。史的イエス研究は、反ユダヤ主義的キリスト論の前提となった硬直した史的イエス理解を批判した。しかしこの立場は、一方でその学問的な蓋然的中立的性格によって反ユダヤ主義的なキリスト論解釈にも開かれており、他方で史的イエスをそのままキリストとして見なすイエス論の危険性にもさらされていた。史的イエスにではなく、メシア／キリストのユダヤ的文脈にもとづくキリスト論の再構築の試みは、ユダヤ的伝統にもとづくメシア理解からイエスを理解しなおす。とりわけ「途上のキリスト論」は、キリスト教の途上性（遅れ）を未だ贖われていない世界に対しイエス・キリストの救いが広がっていく過程として積極的に再解釈する試みとして評価することができる。

第五章では、従来のキリスト教神学とは異なるユダヤ教とキリスト教の両宗教関係の模索の試みを考察している。ここでは、まず四章で見た「途上のキリスト論」に基づく救済史的世界観の再解釈の試みを検討し、キリスト教的反ユダヤ主義の温床となっていたユダヤ教によるイエスのメシア／キリスト性への「否」を救済史の中に積極的に位置づけることによって、従来の代替主義的な両宗教理解とは異なる関係理解を提示した。次に、ユダヤ教の立場から伝統的な契約理解に基づく両宗教関係の再構築を目指した契約的多元主義の試みを取りあげ、他者と連帯するさいに両者の絶対性主張を保持しつつ絶対主義化を回避しうる可能性を模索した。両者は共通して世の贖いへの参与という点に基づいて両宗教相互をパートナーとして規定しており、従来の対立的関係とは異なる積極的な関係理解を提示している。ただし、両者の見解が、「アウシュヴィッツ以後」における両宗教の連帯を重要視しすぎているために、相互の特異性を限定して理解するという問題を抱えてもいた。

第六章では、「国家としてのイスラエル」に対するキリスト教の課題を考察する。「アウシュヴィッツ」を反省したキリスト教は、積極的にユダヤ教との連帯の構築を推進してきた。しかし、「国家としてのイスラエル」においてそれらの試みは、一方でパレスチナ人および周辺のイスラムに対して抑圧的に機能した。また他方でキリスト教の本質主義的なユダヤ人理解は、「アウシュヴィッツ以後」においてもユダヤ人の自己理解とのズレを繰り返し生じさせることによって緊

張関係を生み、「国家としてのイスラエル」が他者に対して開かれる契機を奪ってきた。このような課題の下で、本章は、ユダヤ人の本質主義的規定を回避し、かつ両宗教者以外の第三者にも開かれる、そのような神学的試みとして、聖書の「残りの者／民」の思想を検討している。この思想は、自明視されてきた自己および他者の同一性を積極的に分割し、絶え間ない不一致を導入する機能を有するものであった。これによって自身の内に生じる葛藤と破れとが、他者に対する本質主義的な理解を内から分割し、同時にこの分割／途上の痛みを通して他者に開かれていく、そのような可能性を指摘している。

結論として、反ユダヤ主義の温床となったイエスのメシア／キリスト性に対するユダヤ人の「否」は、キリスト教徒にとって「隅の親石」でもあるということが明らかとなる。というのも、キリスト教はこの「否」を突きつけられ、繰り返し自らのアイデンティティの基礎となるメシア／キリストの到来の出来事が「すでに」と「いまだ」に分割されることによって、はじめて途上性に目を向けることができるからである。そして、この途上性に基礎をおくキリスト教こそ、ユダヤ教／人との正当な関係を回復する可能性を有している。というのも、この途上性は、自身がいまだ不完全であり、同様に世界が未だ贖われていないということをキリスト教徒に自覚させ、同時に世を贖う神の契約へとキリスト教徒を招き、そこに参与する中でユダヤ人との連帯関係に目を向けさせるからである。このように見る時、キリスト教的反ユダヤ主義の温床であったユダヤ人の「否」は、キリスト教徒自身の自足的で自己完結的状态を破り、他者への開きを絶えず促す「刺」であり、これによってキリスト教の普遍性は逆説的に担保されているのである。